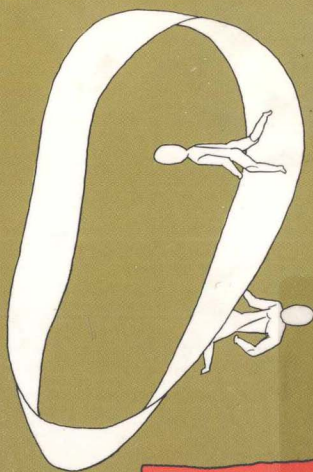
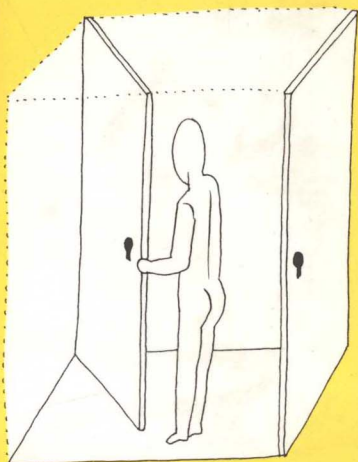
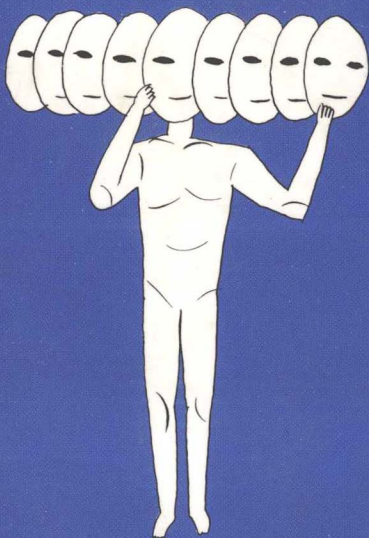


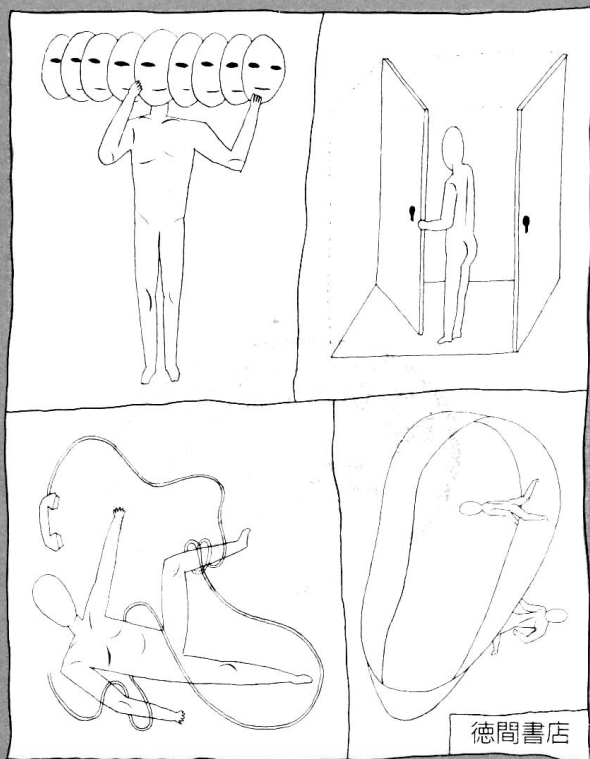
第二次脱出計画

かんべむさし



徳間書店

第二次脱出計画



発行日

一九八八年八月二日 第一刷

著者

かんべむさし

発行者

荒井 修

発行所

株式会社徳間書店

第二次脱出計画

本文印刷

本郷印刷株

カバー印刷

近代美術株

製本所

ナシヨナル製本

〈編集担当 渋谷康人〉

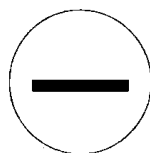
東京都港区新橋四十一 郵便番号一〇五
電話東京(〇三)四三三六三三 振替四四四三九二

定価は帯・カバーに表示してあります。©Musasi Kanbe 1988 printed in Japan
乱丁・落丁本は小社またはお買い求めの書店にてお取替えいたします。

ISBN4-19-123738-1

第二次脱出計画／目次

第

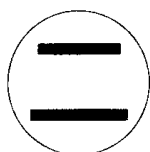


章

はじめはウクウク
おわりはウツウツ

7

第

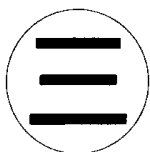


章

ようやくニコニコ
ところがザワザワ

45

第



章

さすがにイライラ
しかるにガヤガヤ

91

第

四

章

ならばとじワジワ

それでもワアワア

147

第

五

章

いまだにポツポツ

けれどもハレハレ

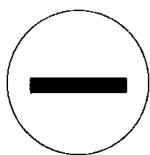
207

イラストレーション
ブックデザイン

山下勇三
矢島高光

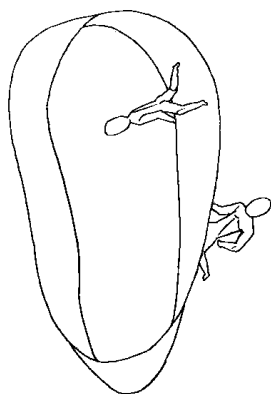
第二次脱出計画

第



章

はじめはワクワク
おわりはウツウツ



ほそほそほそ。

フムフムフムフム。

がやがやがやがや。

ガラガラガラガラ。

十畳の和室に煙草の煙がたちこめ、そのどんよりとした薄灰色の海の底で、男達が麻雀の卓を囲んで喋っている。喋りながら、ときどきわつと笑い声をあげている。卓はふたつあり、それ以外にも横から覗き込む者寝転ぶ者、勝手にウイスキーの水割りを作って飲む者などがいるから、人数合計は十五人に近い。となりの部屋でも同じ光景が見られるはずであり、ゆえにこの一行は、大方三十人からなる団体だということがわかる。若い男、中年の男、背の高い男、太った男。静岡県は熱海の旅館における、某年某月某日の夜。

いやまあと、頭に白い物の混じりかけた壮年の男が、牌をかきまぜつつ、象の眼になって笑いながらゆったりと言った。

「そういうことで考えたら、まあ、あの江戸時代にど

こかの海辺に流れついた黒鉄の釜というやつも、U F Oかもしれない」

「そりゃそうですよ」

巨体で童顔、髪が短く眉毛の濃く太い向かいの男が、少しかすれ気味の声でこたえた。

「あれはあなた、まぎれもないU F Oでさあね。もつとも宇宙から来たのか異次元から来たのか、それはわかりませんけどもさ」

「何しに来たんだ」

となりの卓で勝負中のこれまた巨体の男がふりむき、ずり落ち気味の眼鏡越しにニヤニヤと笑って質問した。

「なかに若い女が乗ってて、そいつは胸に玉手箱みたいなのを抱えてたっていうから、龍宮の乙姫様が浦島に会いに来たのか」

「ごめんなさい。こないだお渡ししたやつは欠陥品でした。時間回路がショートして、煙を噴きませんでしたか」

最初の男がぼそぼそと科白を言い、途端に一座の全

員がどつと笑つて、その右隣りに座っている男もむつふつと唇をゆがめた。

そして額にばらりと下がった前髪をかきあげ、また体がと、低いがよく通る声で決めつけるように言つたのだつた。

「日本人なんてのは、ルーツを探ればどの馬の骨か牛の骨かもわからん奴の集まりなんであつて。中国から来る朝鮮から来る、ポリネシアから来るシベリアから来る。雑種民族もいとこなんだから」

「お、怒り出したぞ。おい、ちよつと点棒を貸してやれ。放つとくとやべえぞ」

ずり落ち眼鏡の巨体がからかい、それで一層その氣になつたのか、彼は声を大にした。

「点棒が来る下駄牌が来る、握り飯が来る沢庵が来る。こないだなんか僕が海岸を散歩してたら、雀荘まで流れ着いて来た」

「あのさ、漂流物の記録を集めた本があつてさ、それ読むとおもしろいんですよね」

前髪男の正面に座った色の浅黒い人物が、それが癖なのか照れたように笑いながら、軽く滑らかな口調で紹介した。

「いまもヤシの実はいくらでも流れ着いて来るし、えと、あの、どこだっけな、九州のどこだったかの海岸に、日露戦争時代の軍艦で使われてた木製のお椀おわんが漂着したとも書いてあつた。八雲だったか、朝日だったか」

「毎日だろう。じゃなきや、読売か」

ずり落ち眼鏡が半畳を入れ、

「ううみいのまわりは、みんなうみい」

その左隣りで白髪の人物が調子外れの歌声をあげて、すると同卓の残りの二人、すなわち細身の男と小柄ながらがっしりとした体形の男が同時に口をはさんだ。

「あ、また始まった。おかあさああん！」

細身は声をあげ、がっしり男はニタリニタリと笑つて、ねちっこく言つたのだつた。

「わあ、おもしろい。おもしろい歌だねえ。もつとな

い？」

それでまたどつと笑い声が起き、そもそもこれは麻雀をやる場なのか、それともそれは単に口を軽くするための手続きなのであつて実は喋ることが本当の目的なのか、どちらとも見当のつかない状況に一層の賑やかさが加わつた。てんでの話し声が、ますます濃くなつてきた煙草の煙とともに、部屋を満たし始めたのである。

「いやまあ、それにしても、日露戦争というのは不思議な戦争だな。満州で国運をかけて戦つてゐる最中に、国内では夏目漱石が『猫』を連載してられたんだからな」

「うん。太平洋戦争中なら、特高に捕まつて竹刀で殴られる。ひでえもんだ。そうなると、我輩は寝込むのであるだな」

「まあ大体が、日本人というのはすぐに集団ヒステリーを起こすんだから。今度戦争が起きたらもつとひどいことになる。SF作家だというだけで、電信柱に縛り

つけられてリンチされる。純文学のやつらが殴りに来る」

「あの、えと、電信柱なんか、その頃に残つてますか。次に戦争が起きるまでには、日本中が地下ケープルになつてゐると思うけど」

「いやあ、残つてゐるかもしれないなあ。花を咲かせるために、歩兵や砲兵が残すわなあ」

「何のことですか」

「輜重輸卒が兵隊ならばつて歌があつたんだが、そうか、若い人は知らんのかわなあ」

「もう、若くはありませんよ。今日、四人もイキのいのが入つて来たんだから」

「やだね。あなたが若くないなんて言つたら、こつちは言いように困るじゃないのさ」

「しかし、年齢から言つて、我われはまぎれもない中年でさあね。なにしろ、この人達、戦後生まれなんだから」

あのと、横で観戦しながらウイスキーを飲んでいた

ひよろりと背の高い男が、眼鏡のなかで目玉をきよと
きよとさせて言った。

「私、なにしろ美貌を誇っておりますもので若く見え
ますが、実は戦中の生まれなんでございますが」

「あ、鳥ちゃん、戦中か」

ずり落ち眼鏡の親分が視線を向け、ついで、そのと
なりにかしこまっている小柄な男にそれを移して問い
かけた。

「なんのちゃんはどうちだ。ああ、戦後派か。しかし、
どうした。嫌におとなしいな」

「はあ。ちょっと緊張しております」

「なあにが緊張してることがある」

前髪男が含み笑いとともに決めた。

「さっきこの男、大浴場で鳥ちゃんと一緒に、湯の色
が変わるくらい騒いどった」

「あ、いや、あれはその」

口ごもり、頭をかきながら、そのときその男すなわ
ち俺は、先程来の会話に心のなかでは歓喜の声をあげ

ていた。手の舞い足の踏むところを知らずという古い
文句を思い浮かべ、長く天井の低いトンネルをようや
く抜けたと感じ、抜けた眼前には晴れ渡った空のもと
広大なる野原がひろがっていたのだとも思つて、自分
で自分を祝福していたのである。

やった。こんな世界があつたのか。あれだけの年齢
あれだけの実績あれだけの立場。それを有する人達が、
好きなことを言いおかしなことを喋り、知識を披露し
意見を述べあい、しかもそれらを楽しんで進めている。
リラックスし余裕を持ち、遊びの心で議論している。

この頭の柔らかさはどうだ。そして嬉しいことに、俺
はこの人達の言っていることがすべてわかる。意味が
わかり趣旨がわかり、駄洒落がわかつて飛躍がわかる。
ここは天国だ。自由の天地だ。俺はもう、ここではど
んなことを考えてもよく何を言ってもよく、それがペ
ダントリーだとは思われず、それどころか逆にこちら
の言つたことの十倍二十倍の知識を与え返してもらえ
ることは確実で、それを思うと俺はもう嬉しくて嬉し

くて、本当はこの旅館中を駆けまわりたいくらいなのだ。ああ、おまえ、よくやった。よく決心した。本日はほぼ同年代の三人とともにこの旅行に誘ってもらい仲間に入れてもらい、ゆえにこれをもって、あの脱出は終了したということができる。エクソダスは、ここにみごとに完了したのだ。ならばこれからは、自由自由、自由あるのみ。それ行け、うわあああつ！

——職業、ドタバタ作家。本名山坂喜三郎で、ペンネームがオール平仮名、なんのぼうし。実はそうではないのだが、まあ、とりあえずそうしておく。そうしておいて、その俺がなぜ第二次脱出計画などという物を実行したか、そしてその結果現在いかなる日常を確保しておるか、その一部始終をいまから報告することにする。エピソードは嘘八百枚分ほどもあるが、そこをぐっとこらえて圧縮し、真実四百枚プラス冗談百枚で収めるのだ。

質問がありますと、ここで鋭い読者なら手をあげるかもしれない。

「その第二次というのが、つまり、この熱海の夜に完了した計画のことなのですか」

ノー、ノー。そうではない。これはいわば作家になろうと決めて行った第一次の脱出なのであって、ただしそのときにはそれが第一次であり、そのうち第二次をやらねばならんようになるのだとは、考えてもいなかった。

とにかく非自由世界への訣別なのであり、しかしそれは逃走でもなければドロップ・アウトでもない、栄光への脱出、すなわち自分にとってのエクソダスであると思っていたのだ。よろしい。以後の話をよりよく理解してもらうために、まずこの章では、その大前提ともなった経緯をざっと呑み込んでおいてもらうことにしようか。

なんのぼうし著『びっくり仰天八万人』、『アチャカ大学日記』。こういう本の読者ならすでに御承知のことだろうが、昔むかし、俺はサラリーマンだった。

大卒初任給がまだ五万円台だった頃に学校を出、大阪の広告代理店に入社して制作の仕事をしていたのだ。なにしろ在学中は社会学部のマスコミ専攻、おまけに広告研究会などというクラブに所属していたくらいだから、広告業界制作マンといえは憧れの世界理想の職業。

「なりたいたりたいたりたいたいなりたいたい」

夜も寝られぬほどに思いつめ、身体をはてらし頭を熱くし、といって成績優秀ならざるため大手の試験には推薦状をもらえず、えいくそとばかりに新聞の求人広告で飛び込み受験をした挙げ句の就職だった。いやあ、俺は広告マン以外にはならんと決めていただけに嬉しかったなあそれが実現したときは。

「ああ、俺は遂に望みを果たした夢をかなえさせた。企画、表現、コピー。自分のアイデアをどしどし世間に発表し、受ける広まる誉められる、三ルでもって快感満足感を獲得するのだ。よおし、やるぞお」

社員数三十人弱制作部員俺を入れて四人という零細

企業だったが、最初の一年二年は、まあ、本当に興奮驚喜して働いた。

「失礼します。製版所の小父さあん、零細エージェンシーですが、凸版上がってますかあ。全五段一版と半三段が二版」

「あ、これね。合計三版」

「はいはいどうも。うわあ、きれいに仕上がるもんですねえ。小さい字でも細かい地図でも、こんなにくつきりと出るなんて」

「あたりまえやがな。あんた、そないに感心するところを見ると新入りやな。道理でおばこい顔してるわ。まあ、その新鮮な気持ちを忘れんようにして、精々ががんばりなはれ。あつはつはつ」

こういう使い走りの手伝い仕事から始めて、新聞社雑誌社ラジオ局テレビ局、各媒体社をまわって広告素材の搬入をする回収をする。ラジオCMの原稿を書きPR映画のロケーション助手を勤め、専門紙業界誌などの記事体広告を作る対談をまとめるゴースト・ライ

ディングをする。印刷媒体電波媒体、とにかく人が少ないからなんでもするしさせられる。

「喜三郎、なかなかやるじゃないか」

「山坂さん、真面目ですね。いつも鼻の頭に汗をかいて走りまわってる感じでね」

「我社みたいな下請けの事情をよくわかってもらえるんで、ホント、ありがたいです」

先輩社員、フリーのデザイナー、出入りの印刷会社営業マン。こういう人達から好意的な言葉をかけてもらえるまでになっていたのである。それもそのはず、とにかく真剣に、本気で、どんな小さな仕事も嫌がらず馬鹿にせず取り組んだのだからな。なぜならそのすべてを、本当におもしろく楽しく、わくわくする経験であると感じていたのだからな。

と読むと、素直な御方なら好意好感を覚えて言ってくれるかもしれない。

「じゃああなたは、経営者にも受けのいい、模範的な社員だったんですね」

だが、まことに申し訳のないことに、そうではなかった。嫌がらず馬鹿にせずとはとりあえず仕事そのものに対してだけであって、二年目にかかる頃から、俺は上司にして取締役の河馬平なる男に対しては、心の底から嫌がり軽蔑し馬鹿にしていた。俺だけではない、ほとんどの社員がその気持を押さえつつヘイヘイなるほど御無理ごもつとも偉いなあさすがだなあと言っていたわけで、要するに河馬平は嫌われ者であったのだ。そりゃ嫌われますわな馬鹿にされますわな。

「ああ、あそこの西園寺部長ね。あれは僕の古くからの知り合いでね、三高京大ですわ。それから、例の近衛専務も旧友でして、あの人は一高東大ですよ。うん」

「ええ、つまりその、いわゆるセールス・ポイントとしては、この製品の持つ独特のプアな味わいを強調したいと思うわけでして」

「みんな今度の土曜日、うちに遊びにこないか。すき焼きでもしようじゃないの」